

ベラクルースのアメリカ軍

主義主張や立場の異なる参加者が構成するアグアスカリエンテス会議同盟には全体を掌握する指導者がいなかった。公にはエウラリオ・グティエレス大統領を支持し、彼の権威を皆が受け入れていたのに、実際には大統領官邸のあるメキシコ市でさえも彼は権限を行使することが出来なかった。ビヤは会議同盟軍最高司令官で最も人気があった。しかし彼は自分の北部師団のみを統括し、サパタは自分がビヤの配下であるとは考えず、自分が必要と認める作戦にのみ参加した。ビヤはマイトレナやその他カランサに属さない勢力へ大きな影響を及ぼしてはいたが、誰もビヤに従わなかった。会議派が占めている地域全体を政治的あるいは軍事的に統一できる指導者はいなく、互いに経済的な繋がりも無かった。ビヤには他のグループへ武器を供給する能力がなく、あるいはその気が無かったのが統一を妨げた原因である。³¹

ヨーロッパで戦争が勃発してから、メキシコへ武器を供給できる国はアメリカしかなかった。英国、フランス、ロシアその他の参戦国は競ってアメリカから武器を購入し、武器の値段は急激に高騰した。会議派は国の大部分を支配するようになっていたのとは逆に、アメリカからの輸入に割り当てる資金は減少していた。1914年の初め、革命を支える資金源となった牛の群れは、大量の売却によって枯渇していた。ラグーナ地区で栽培されていた綿花の収穫は極端に落ち込み、革命軍の収入源であったアメリカ人所有の鉱山は既に営業を中止していたため税金を徴収することは出来なかった。ビヤは益々アメリカ人の善意に頼ることになった。外国人所有の鉱山で操業を再開させ、アメリカの商人が再び国境を越えてやって来て、ビヤの発行する通貨を受け取るよう、ビヤはアメリカ人を懐柔する必要があった。商人たちがビヤの通貨を受け取る背景には、アメリカ政府が支持しているので、ビヤは必ず勝利する、という漠然とした概念がアメリカ人の間にあったからである。もしアメリカ政府との関係が緊迫すると、ビヤの購買力が一気に低下する恐れがあった。そのためビヤはアメリカの反感を買うような過激な社会改革を行うことが出来なかった。³²

カランサ派も会議派と同じく様々な分子がいた。しかし会議派と比較すると、はるかに均一性があった。サパタ派や北部師団に比べてカランサ軍はメキシコの何処でも戦う意力のある正真正銘の職業軍人で構成されていた。多くの会議派の将校も兵も、自分たちの地域で活動していて、其処から離れることには消極的であった。多くのカランサ派の将校は自分の故郷を遠く離れて活動していたし、故郷を支配していたのは自分たちではなかった。彼らはカランサ軍の全国制覇を拠所にするしかなかった。

1914-15年の内戦が進行するにつれてカランサは彼の支持者に対する権力を強めていった。その最大の理由は彼がメキシコ最大の港湾都市ベラクルースを支配することにより、資金を握ったためであった。カランサが掌握した輸出商品は、タンピコの石油、ユ

カタンへのニケン、チアパスのコーヒーであった。北方の輸出用作物地帯と異なり、南部や石油地帯は戦争や革命の影響を全く受けず、第一次大戦による原料逼迫で値段が高騰するのに合わせ、増産することができた。これによるカランサの歳入は、会議派が支配していた地域から集めた額の倍に達していた。ウイルソン政府はビヤを最優先にしているように見えたが、カランサに遥かに大きな援助を与えていた。1914年初頭、ウイルソンは閣僚会議でウエルタ政権の早期打倒を狙ってメキシコへの軍事介入を決定し、秘密裏に行動を開始した。アメリカ軍の行動はメキシコ革命の結末に大きな影響を及ぼすことになった。

33

国防相、陸海軍はアメリカとメキシコ両国の軍事力とロジスティックスを具に比較研究して作戦を立て、部隊の輸送のため、ガルヴェストンとフィラデルフィアに物資を集結した。1914年4月21日、海兵隊がベラクルースに上陸した時には、サンファン・デ・ウロアの兵器庫や要塞の中、市役所の兵器庫、ベニート・フアレス灯台の中、そして連邦軍の駐屯施設として使用されていた建物に膨大な量の兵器と軍需物資が堆く積まれていた。アメリカ軍はそれらを全て管理下におくと同時に、沖待ちしていた四隻の船の貨物を没収した。アメリカ軍が撤収した11月24日までの間に延べ二十隻ほどの船舶が武器弾薬を搭載して入港した。米軍がきちんと保管していた武器弾薬は一万三千の部隊を近代装備できるほどの量があった。³⁴

米軍撤収時に於ける革命軍の主な指導者はビヤ、サパタ、会議派大統領エウラリオ・グティエレス、オブレゴン、カランサであった。米軍ジェネラル・ブリッス、パーシング、フンストンは一致して、ビヤは低社会層の指導者で、非道、野心家、無責任、残忍であると評していた。ウイルソン大統領のプライアン國務長官、そして二人の特使、ジョン・リンドゥとドゥヴァル・ウエストはビヤを評して、反逆的、社会主義者、山賊と呼んだ。アメリカの高官は揃ってビヤ、サパタ、会議派政府に反対した。ワシントンは社会的地位が高く、元国会議員、州知事である「狡猾な古狐」カランサを重要視していた。

ベラクルース占領中にアメリカ政府は憲政派と緊密な関係を築いていた。九月カランサは自分の娘婿で、メキシコ軍で最も若いジェネラル・カンディド・アギレをベラクルース州知事に任命した。彼は七名の憲政軍将校をベラクルース港での武器弾薬の受け取りにあたらせた。その中にはセラヤの決戦で活躍したオブレゴン傘下の騎兵指揮官アレホ・ゴンザレスがいた。彼らは米軍が撤退する前の二ヶ月間、米軍と共同作業を行った。ゴンザレスは騎兵用装具千五百人分を受け取った。彼の騎兵二千はレオンの戦いでビヤ軍を側面から攻撃して勝利に貢献した。

1914年11月23日、アメリカ軍は武器庫から守備兵を引き上げ、それまで共に働いてきたメキシコ人に鍵を渡した。アメリカ軍は更に関税として徴集した約二百六十万ペソ余りの基金をニューオルリンズに置き、カランサに条件付で渡すことを約束した。条件

はベラクルースで米軍に協力したメキシコ人に危害を加えないことであった。 35

31. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P453
32. Ibid. P454
33. Ibid. P455
34. John Mason Hart, "Revolutionary Mexico, the Coming and Process of the Mexican Revolution, 10th Edition", University of California Press Berkeley, 1989, P298
35. Ibid. P299